

歴史資料館ニュースレター

2010. 3. 31 Vol. 1
明治学院歴史資料館発行

目次

- 創刊にあたって 一館長 辻泰一郎 ・・・ 1
- 明治学院歴史資料館講演会要旨『金沢から見た宣教150年』 辻直人 ・・・ 2-3
- 資料館所蔵資料紹介 ・・・ 3
- 島崎藤村の書簡—明治38年12月11日広助宛— ・・・ 4-5
- 2009年度資料館開催展示会、受け入れ資料 ・・・ 6
- 歴史資料館について ・・・ 7

創刊にあたって 一館長 辻泰一郎

明治学院歴史資料館は、1995年の理事会決定に基づき1998年に開設され、大学図書館長と兼任するかたちで初代館長の阿満利麿、第2代館長巖谷國士、2002年からは、独立の館長として播本秀史、久山道彦のもとで育まれてきました。現在、歴史資料館の活動は、大きく3つの柱から成り立っています。第1は、ヘボン博士たちによって建てられた明治学院の歴史に関わる資料の収集と管理を行い、これをデータベース化しながら情報の提供と併せて幅広く内外の利用に供することで、学院の歴史的な建造物で、その中に歴史資料館がある記念館において、一般の方々にも学院の歴史が目に見えるように重要な歴史資料の常設的な展示と別途季節的な企画展示を行っており、これに



合わせて、学院の歴史をテーマとする講演会を毎秋開催して参りました。第2は学院の歴史資料の収集事業とも関連して、『明治

学院歴史資料館資料集』の刊行で、これまで毎年発刊し、本年度は第7集が出ることになっています。こうした資料集の刊行を通じて、私たちは日本近現代史に関わりを持つ明治学院の歴史の掘り起こしと、さらにいわば「明治学院学」ともなりうる自己認識の資料基礎を固めていくことを念願しています。周知の通り、明治学院は、1863年（文久3年）にヘボンが横浜に英学塾を開設したことにその起源を持っており、2013年に本学は開校150年目を迎えることになります。歴史資料館の活動の第3の柱は、まさに、この明治学院150年史の編纂事業に置かれており、現在研究員の方々のご協力を得ながら作業を進めています。

歴史資料館委員会において、一昨年来他大学の歴史資料館等同類の施設の活動を参考に、上記の活動を紹介するニュースレターを本資料館でも公刊することが有意義ではないかということが話題となり、承認を受けて、ここに第1号を出すに至った次第です。これを機に、キリスト教系教育機関のみならず、学校・教育関係その他の方々とも広く交流を深めることができれば幸いです。



『金沢から見た宣教150年』

辻 直人

北陸学院大学短期大学部准教授、歴史資料館研究員
キリスト教研究所協力研究員、明治学院150年史編集委員

はじめに

2009年はヘボンやS.R.ブラウンらによる日本宣教開始150年目にあたるが、石川県金沢市にとっては宣教130年目だった。と言うのも、1979年に米国長老教会宣教師T.C.ウィンによって金沢伝道が開始されたからである。ウィンはS.R.ブラウンの甥にあたり、同じ米国長老教会による伝道地であることから、金沢と明治学院には実は深い関係がある。

1. 明治学院と金沢（1）

『明治学院百年史』113頁でも指摘されているように、明治学院の前身の一つである東京一致英和学校には2つの予備校が存在した。『東京一致英和学校規則』（1884年）によれば1つは「神田淡路町」に、もう1つは「石川県下加州金沢高岡町」に設置されていた。前者は「英和予備校」として知られているが、後者は『明治学院百年史』では「幻の学校」とされている。

金沢でこれに当たる学校と考えられるのは、1883年認可された「愛真学校」である。この愛真学校が東京一致英和学校予備校だったことを裏付ける史料はない。当時愛真学校は高岡町ではなく近接する南町にあり、この点も『規則』の記述と合致しない。しかしウィンの書簡から、愛真学校と明治学院の深い関係を伺うことができる。1885年に「北陸英和学校」と改称された愛真学校はウィンらの尽力で運営されていたが、1892年3月5日付ウィン書簡には以下のように書かれている。

「金沢ボーイズ・スクールを卒業して、現在明治学院に在学している者が三名おります。今年のクラスの中には神学生として明治学院に進学する予定の者、つまり一年以上普通教育を受けてから神学校に入学する者ですが、四、五名含まれております」「計画の中の制度改革については、履修過程を一年短縮し、わが校の学生を従来よりも早く明治学院に送ろうというものです」（鈴木進訳『北陸学院短期大学紀要』第18～20号、1986～89年）

北陸英和学校は明治学院への進学を推進していた。しかし同校は1899年、いわゆる文部省訓令第十二号問題で廃校した。

2. トマス・C・ウィンの宣教活動

ウィンが叔父ブラウンから受けた影響は大きかった。このことについては拙訳『明治学院歴史資料館資料集』第6集を参照されたい。1877年来日したウィンは、1879年10月、「金沢が大藩の城下であるにもかかわらず、文化の程度がやや遅れ、しかも仏教の勢力が頗る熾烈であるときき、このような地方こそ己が生涯を献ぐべきところであると考え」（中沢正七編『日本の使徒 トマス・ウィン伝』31頁）、M.ツルーと共に夫妻で横浜より金沢へ入った。最初の仕事は金沢中学師範学校の英語教師だったが、本格的な宣教活動に入ると、1881年に金沢教会（現日本基督教団金沢教会）を設立し、前述した愛真学校での男子教育にも深く関与した。1931年金沢で礼拝中に倒れ召天した。

3. 女性宣教師の活躍

金沢の宣教教育活動の礎を築いた2人の女性宣教師がいる。1人はフランシナ・ポーターである。フランシナは1882年、先に金沢でウィンを助けていた兄ジェームス宣教師を頼りに金沢へ入り、1886年に英和小学校と英和幼稚園を開設した。小学校は文部省訓令第十二号の影響で1899年に廃校となるが、英和幼稚園は現在も北陸学院第一幼稚園となって、日本に現存する最古の私立幼稚園として存続している。また小学校も1961年に北陸学院小学校として再興された。



もう1人はメリー・ヘッセルである。1882年大阪に来日したヘッセルはウィンに誘われ翌年金沢で私塾を開始、1885年には正式に金沢女学校を開校した。これが後に北陸女学校、北陸学院と改称され発展を続けている。

4. 明治学院と金沢（2）

改めて明治学院と金沢の関係を見ておく。金沢教会初代牧師で金沢女学校第2代校長も務めた青木仲英は東京一致神学校卒業生である。戸田忠厚は1874年に横浜海岸教会で日本人初の按手札を受け1887年金沢殿町教会へ赴任、1899年からは金沢女学校第3代校長も務めた。金沢女学校第4代校長で後年明治学院中学部長も務めた水戸幾次郎まで、金沢女学校2

～4代目校長は明治学院出身者だった。この他にも、明治学院高等学部長を務めた中山昌樹は愛真学校出身である。北陸女学校第10代校長の中沢正七も明治学院普通学部や神学部で学んだ経験を持つ。金沢教会創設メンバーの1人である加藤覚も、明治学院神学部に進学した。

おわりに

150年前にヘボンやブラウンから始まった宣教活動は日本各地に福音の種を蒔いていったが、金沢はその収穫の1つであり、横浜から比べて20年の遅れはあるものの、明治学院と深い関わりを持ちながら宣教教育活動が繰り広げられていったのである。

資料館所蔵資料紹介

小川一眞コロタイプ写真集 『日本風景風俗写真帖』 鉄道院刊



八重洲町通

明治終りから大正期ごろに作られた写真集『日本風景風俗写真帖』には、小川一眞が撮影した風景写真50点が収められています。全国各地の風景や、人々の生活が美しく撮影されており、また各所に施されている色付けにより、写真を眺めているだけでも当時の雰囲気がそのまま伝わってくるようです。

『日本風景風俗写真帖』は現在資料館にて展示中です。

小川一眞（かずまさ）は写真製版を日本で最初に実用化した人です。小川一眞は、学院創立者の一人であるヘボンが来日した翌年の1860（万延元）年、行田に生まれました。築地大学校と改称した明治学院の前身校に入学し、その後ボストンで最新鋭の写真技術を学びました。



大阪道頓堀

(翻刻・解説) 永瀨朋枝氏

書簡解説

本書簡は、島崎藤村(春樹)が明治38(1905)年12月、次兄広助に、長兄秀雄の長女である姪のいさ子(「勇子」)の縁談の相談をし、追伸で『破戒』(明治39年3月、自費出版)脱稿を伝えた手紙である。「島崎氏蔵」とある朱色の長方形のマス目(前2行は罫線のみ)のある和紙に毛筆で書かれている。

書簡宛先の次兄広助は、馬籠本陣島崎家から妻籠本陣島崎家の養嗣子となった。広助が奔走した木曾御料林事件は、長年事態が好転せず、この年6月、植林経営資金の木曾への下賜で交渉を妥結したところであった。

長兄秀雄は、25年馬籠から一家をあげて上京したが、下谷三輪町に住んだ時(「三の輪時代」)に水道鉄管にからむ不正事件のため未決監に収容され、30年出獄。その後、九州での金塊引き上げ事件に関係して有罪となり、2年間の禁錮を受けた。本書簡当時、秀雄は後者の事件で服役中であり(「廣嶋」は廣嶋監獄であろう)、妻松江(「下谷姉」)、長女いさ子、次女薫子は下谷西黒門町にいた。いさ子は、藤村のすすめで少女時代から日本画を修め、日本女学校で学んでいた。縁談は日本女学校校長、西澤之助氏(「西氏」)からのものである(西氏は後年、フランスから帰国した藤村にも縁談を世話した)。

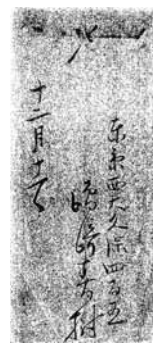
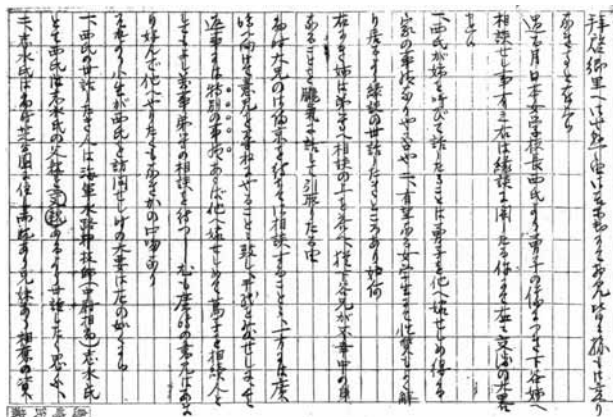
本書簡の後、秀雄は出獄して台湾に渡り、大塚氷間屋に勤めた。いさ子は、41年3月日本女学校専修科を卒業した。生活苦の中、信州北佐久の神津猛の家に家庭教師に赴く話もあった(同年3月11日猛宛藤村

書簡。神津猛は『破戒』執筆時の生活費等を支援した人)が、42年西丸哲三に嫁いだ。その婚約中に、薫子は事故で夭折した。43年には藤村の妻冬子が死去し、広助の次女こま子らが藤村の家に来て家事育児を手伝った。藤村とこま子との関係を描いた『新生』(大正7~8年)の発表によって、本書簡の宛先である広助は藤村を義絶し、それは生涯続いた。

秀雄、広助、藤村、いさ子は、『家』(明治43~44年)においてそれぞれ、実、森彦、三吉、俊のモデル。俊の婚約中、三吉が森彦に「一体、吾儕が斯うして——殆んど一生掛つて——身内のものを助けて居るのはそれが果して好い事か悪い事か、私には解らなく成つて来ました」「俊を学校へ入れたのは、彼女に独立の出来る道を立て、やつて、母親さんを養はせる積りだつたんでせう。ところが、彼女は学校の教師などには向かない娘に育つて了ひました」「吾儕は長い間掛つて、兄弟に倚凭ることを教へたやうなものぢや有りませんか」という場面がある。

本書簡追伸は、『破戒』脱稿の頃の藤村の昂揚した気持ち伝えて(脱稿日は、明治38年11月27日神津猛宛書簡等には、「廿八日」ではなく「廿七日」とある)。本書簡は、筑摩書房『藤村全集』未収。伊東一夫・青木正美編『写真と書簡による島崎藤村伝』(「22 明治39年12月11日付」とあるが、内容から見て明治38年。国書刊行会 平成10年)に写真が掲載されている。当時の藤村の親戚への思いや、奔走ぶり、広助との関係等がよくわかる書簡である。

広助宛書簡(3枚中1枚目)



『藤村全集』筑摩書房 昭和41～46年、伊東一夫編『島崎藤村事典 新訂版』明治書院 昭和57年、北條浩『島崎藤村『夜明け前』リアリティの虚構と真実』御茶の水書房 平成11年、等参照)

翻刻

長野県西筑摩郡吾妻村 嶋崎廣助様

東京西大久保四百五 嶋崎春樹 十二月十一日

(1枚目) 拝啓郷里へ御出懸の由御葉書にて拝見皆様も御変りなき事と存上候

過る月日本女学校長西氏より勇子の儀につき下谷姉へ相談せし事有之右は縁談に關したる件にて左に交渉の大略申上候

一、西氏が姉を呼びて話したることは勇子を他へ嫁せしめ得る家の事情なりや否や 二、有望なる女学生にて性質もよく解り居るより縁談の世話したきところあり如何
右につき姉は弟等へ相談の上を答へ、猶下谷兄が不幸中の身なることを臆気に話して引取りたる由
当時大兄の御帰京を待ちて御相談することゝ、一方には廣嶋へ向けて意見を尋ねにやることゝ致し、手紙を発せしに、其返事には特別の事情あらば他へ嫁せしめて薦子を相続人としてもよし萬事弟等の相談を待つ ——尤も廣嶋の意見はあまり好んで他へやりたくもなきかの口吻なり

それより小生が西氏を訪問せし時の大要は左の如くに候

一、西氏の世話したき人は海軍水路技師(中尉相当)志水氏とて西氏は志水氏の父親と親交あるより世話したく思ふ、 二、志水氏は当時芝公園に住し両親あり兄妹あり相当の資

(2枚目)

△六いよゝゝ家を持つ暁は別居の計画なり

産あり、三、萬事は西氏の意見に一任しあり、四、約束だけすれば学校を卒業する迄待ちて儀式を挙ぐるともよし、五、志水氏は当年二十五六——猶西氏は不幸中の下谷兄といふ姉の言葉を気にかけて種々尋ねらる、小生はまさかにそれとも言ひかねてかの三の輪時代の出来事を今に焼直して話したり、西氏曰く先方でこの事を気にするか否か差支

なくば手紙にて報告すべしこの一点さへ決せば他は同氏の世話一つなり嫁に遣る意志ありや如何

右につき下谷姉は心動きたる様子、勇子はむしろ他へ嫁く方を望める風なり

小生思ふに来夏下谷兄帰宅して勇子の為に相応の養子を迎へんには六七年の準備を要すべし更に一事業の成效を待ちて家督のことを考へ得る頃は薦子も今の勇子の年頃と見てよからん勇子の幸福より言へば他へ嫁かしむる方至当かと思はれ候来夏下谷兄も帰宅するとすれば其以後はもとより下谷兄の方針にてどうともなるべし、兎に角勇子の卒業を待つ間には下谷兄も既に娑婆の人なり、相当の縁談あらば約束する方反つて幸福の種かとも考へ申候 就いては志水氏の家、性質等は小生の友人を通して只今調べ

(3枚目) 方を依頼中なり

勇子の家の状態——生活程度は西氏も承知、先方は富める家の娘を望まず人物に重きを置くとなり

下谷兄の境遇が境遇なれば是縁談の約束果してまとまるべきや否やも未決なれど——もし先方を研究してよきそうに思ふ場合に、大兄の御考は如何

要するに勇子卒業の暁、女教師として下谷の家を助けしむべきか、相当の縁談あらば耳を傾け薦子をして下谷の家を継がしむるかの二点に候至急御意見御返信被下度待上候

十二月十一日

春樹生

廣助兄

先月廿八日午後七時は小生にとりて記念すべき時日に有之候昨年四月よりの著作はその時に完成いたし候

艸稿紙数五百三十五、章数二十一、長き々々労作を終り今は清書に取かゝり挿画等は印刷中、この冬ほど多忙にして且つ希望に満ちたる幾日はすくなく候

永渕先生は2009年9月に歴史資料館をお訪ねくださいました。先生は島崎藤村もご研究されているとのことで、同年7月に歴史資料館で入手した藤村の広助宛書簡をご覧いただき、ご研究の一助になればと複写等さしあげました。しばらく後、先生より書簡の解説と翻刻をいただきました。このたびニュースレター発行にあたり先生に掲載許可のお願いをいたしましたところ快諾いただいた次第です。改めて感謝を申し上げます。

永渕朋枝氏

神戸女子大学文学部日本語日本文学科准教授
日本近代文学を主に研究



島崎藤村

2009年度資料館開催展示会

本年度、歴史資料館で開催された展示会は以下の通りです。

学校行事	展示会
大学・高校入学式(4/1,2,7)	ヘボン・ブラウン・フルベッキ博士 資料写真展
戸塚まつり(5/30,31)	ヘボン・ブラウン・フルベッキ・島崎藤村 写真パネル展
図書館・宗教部・歴史資料館・広報室 連携企画ヴォーリズウィーク(6/1~6)	ヴォーリズ 写真パネル・資料展
白金・横浜オープン・キャンパス (7/19, 8/8, 8/29)	ヘボン・ブラウン・フルベッキ・島崎藤村 写真パネル展
英学史学会大会(10/10, 11)	ヘボン・ブラウン・フルベッキ 写真パネル展
校友の集い(10/24) 白金祭・東京都文化財公開日(11/1~6)	ヘボン・ブラウン・フルベッキ・島崎藤村 写真パネル展
歴史資料館講演会(11/7)	キリスト教研究所、横浜プロテスタント史研究会共催講演会 講演者：辻直人氏
大学・高校卒業式(3/10, 18, 19) 白金オープン・キャンパス(3/27)	史料でたどる明治学院の歴史

2009年度受け入れ資料

寄贈

- 賀川豊彦筆短冊 2幅 (三坂央氏寄贈)
- 新約聖書^{ヨハネ}約翰傳 全 (久米三千雄氏寄贈)
ヘボン・ブラウン・奥野昌綱共訳, 1872
- 新約聖書^{マルコ}馬可傳 全 (久米三千雄氏寄贈)
ヘボン・ブラウン・奥野昌綱共訳, 1872
- 「私の戦争体験」‘特攻隊を生き抜いて’
講演会集とその関連資料 (矢ノ目寛彰氏寄贈)



賀川豊彦筆短冊



新約聖書約翰傳・馬可傳

購入 (抜粋)

- 『星は乱れ飛ぶ』 沖野岩三郎 大阪屋號書店, 1923
- 『悲しき仮面』 沖野岩三郎 大阪屋號書店, 1926
- 『新日本の開拓者 ゼー・シー・ヘボン博士』
山本秀焔 聚芳閣, 1926
- 『改訂 讚美歌物語』
マクネヤ/別所梅之助 警醒社, 1933
- 『聖書物語』 沖野岩三郎 基督教出版社, 1935
- 『明治文學研究誌』 岡野他家夫 東京武蔵野書院, 1938
- 『日本伝道百年史』 バラ・マカルピン宣教記念誌発刊
編集委員会 つのぶえ社, 1978
- 『ヘボン在日書簡全集』 岡部一興編
高谷道男・有地美子訳 教文館, 2009
- 『植民地教育史研究年報第1-10』
日本植民地教育研究会, 1998-2007

歴史資料館について

歴史資料館利用案内

- 場 所：白金校舎 記念館2階
- 開館時間：9：00－16：00（月一金）
＊11：45－12：30の間は休室します。
＊展示室はどなたでもご覧になることができます。
- 休 館 日：土・日曜日、祝祭日、夏期・冬期休暇
学院創立記念日(11/1)、クリスマス(12/25)

歴史資料館所蔵資料

- 学院関係資料：寄附行為・学則・要覧
その他学院関連資料・各種記録写真など
- 個人資料：ヘボン・ブラウン・フルベッキ・井深樫之助
賀川豊彦・島崎藤村など学院関係者の手稿類
- 教会史関係：日本基督一致教会中会・大会記録など

歴史資料館ではこのようなことをしています

- 1) 学院関係資料等収集
 - 2) 資料等のデータベース化
 - 3) 学院関係資料に関する利用及び参考業務
 - 4) 展示会
 - 5) 講演会
 - 6) 資料による研究の推進
 - 7) その他
- ＊展示会・講演会は随時ホームページにてお知らせしています。

歴史資料館所蔵資料を閲覧・利用できる方

- 1) 本学院大学生、大学院生
 - 2) 本学生徒
 - 3) 本学教職員
 - 4) 卒業生、元教職員
 - 5) 他大学図書館などからの紹介者
- ＊上記以外で閲覧希望の方はご相談ください。
＊資料館内で閲覧できます。

刊行物のご案内

～明治学院歴史資料館では、毎年『明治学院歴史資料館資料集』を刊行しております～

- 第1集 井深樫之助 生誕150周年記念号
- 第2集 『明治学院九十年史』のための回想録
- 第3集 ヘボン資料集
- 第4集 『精神的基督教』
- 第5集 戦前・戦中・戦後の明治学院
- 第6集 『アメルマン・フルベッキ・ブラウン・ヘボン・J.H.バラ史料集』

＊1・2・4・5集…¥1,050、3集…¥1,260、6集…¥1,000（すべて税込）

新刊のお知らせ

『明治学院歴史資料館資料集 第7集 一昭和三〇年・四〇年代の明治学院一』

本書は昭和30年代と昭和40年代を明治学院ですごした卒業生の座談会記録をテープ起こしし、必要な補正を加えたものです。ミッションスクールとして少人数教育を理想と掲げる本学において昭和30年代末から昭和40年代初めにかけての急速な規模拡大は、学院の発展の姿を示すものであると同時に、少人数教育の理念との間の齟齬と軋轢を意味するものでありました。その時代を学生・生徒の立場から見た実際の情景が記録としてとどめられることの意義は少なくないと思われます。あわせて収録した森井眞・金井信一郎元学長の回顧談は、これまでの明治学院の歩みを顧み、今後を展望する上で誠に示唆に富むものであります。

（館長序文より）

2010年3月刊 定価1,200円（税込）資料館にて販売



明治学院は 2013 年に
創立 150 周年を迎えます。

この度、明治学院歴史資料館のホームページがリニューアルされました。ぜひご覧ください。

<http://shiryokan.meijigakuin.jp/>

明治学院歴史資料館ニュースレター 2010. 3. 31 Vol. 1

発行者 明治学院歴史資料館

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37

TEL・FAX (03) 5421-5170 siryokan@mguad.meijigakuin.ac.jp